

雨宿りの箱庭

～ 秘密の花園 ～

森下 温美

(関西医療学園)

— 翌年 —

I. はじめに

本報告は、筆者が『雨宿りの箱庭』と名づけている DV (domestic violence) シェルターでの箱庭の第六報である。存在の根源を深くゆすぶられた被害者の作品から受ける深い宗教性に突き動かされ続ける一方で、被害者による殺人まで生むなど被害者のために機能していないシェルターの存在に心を痛めている。

DV シェルターの事例は、一般の事例と比較すると、作品そのものに注意が向けられず、感情的な先入観や偏見に終始される傾向が強く、ユングやカルフの残した研究の更新どころか現象学的方法や傾聴に徹するという臨床の基本姿勢さえ吹き飛ばしてしまう威力がある。

これはまさしく DV が集合的無意識の問題であるからに他ならないだろう。非暴力は人類最大の課題であるとされて久しいが、集合的無意識に潜む第一のタブーでもあるので、暴力は単に当事者間の問題に限定されず、あらゆる人間関係を破壊してしまう。国際的にも眉眉の問題となり、ドメスティックレヴェルで足踏みしているわけにはいかない現状にも関わらず……。

幼い CI が過酷な状況のなかで筆者に伝えてくれたことを報告することが、今一度臨床心理学が原点に立ち戻ることにつながると願う。

II. 事例の概要

クライアント (以下 CI と表記) は 5 才 (開始当時) 女児である。母親 (40 代) の精神的病のため社会的に孤立していたが、CI の明るさが社会的支援をかりうじてつなぎとめる役割をし、箱庭の中で治療者 (以下 Th と表記) と【花園】を眺めるなかで現実を整理しなおし、検討されていた母子分離を回避して過酷な日常に還るこころの準備をすることができた。

III. 事例の流れ

1 箱庭①

袖を引かれふと振り返ると、小さな CI が「お砂したい」と Th を誘った。短時間で、地門 (右下) に蛙の親子やお供えものと独楽などを置くと満足したように退室していった。

2 箱庭②

地門に食卓を置き、お姉さんに続いて母子が現れ池が出現するものの、バス事故が発生して人形が飛ばされる。しかし再び立て直され食卓はひいだまで囲まれた。「なぜ砂があるのか」と質問し、底の水色を残念そうに見る様子や作品を壊そうとして Th に〈大事に〉と言われた時の反応が印象的だった。じゃんけんで「グーしか出せない」と訴えたので特訓する。

3 箱庭③

「またグーしか出せなかった」〈でも一番やなあ〉という会話のあと、地門を見て甘えるようにお供えを置く。食卓と金魚。二組の二人連れが手前半分に表現される。

4 箱庭④

ててやあ」と言いながら、手前半分に花園を作る。鬼門 (右上) では 1 つのベッドに二人の子どもが寝ており、バギーに赤ん坊がいる。地門には気味悪いと言いつつ蛙を置く。Th の似顔絵を描いてくれた。

5 箱庭⑤

前回 Th に作らせた綿菓子をつま (左上) に置く。花園は向こう側半分に移動。ベッドが手前に移動し、地門に食卓が出現。ベッドの二人に蛙が襲いかかり、起き出した二人は食卓に着いて花園を眺める。気分がすぐれないと来室した母親は、箱庭に使うとカプセルを寄贈する。

6 箱庭⑥

鬼門手前の滝に蛙。人門 (左下) に洞窟。地門に食卓。それらの間に水辺の生き物。全体にひいだまが撒かれたあと、二重に覆われる。雪のイメージらしい。覆いの間に 2 つのお供えがあった。母親はおしゃれをして陽気に来室。

7 箱庭⑦

砂に違和感を覚え、ブレンドする。途中で出来た山がオリジナルだと気に入り、山にお供えを置いたあと水盤を置いてみる。地門には駅が出現。水盤に水を入れたくなり汲みに出たことで、凍りつく出来事に遭遇

し、少し泣いてからふと笑って再開する。蟹はまだ赤ちゃんだからお母さんと一緒にといい、蛙の親子はスイカを食べている。鍵を見て「本物?」と質問する。

8 箱庭⑧

「明日でお別れ淋しいなあ」と言って始めると、砂箱から砂を全部出したくなる。出した後やはりなくては困ると思ひ直し、底に覆いを敷いてから砂を戻す。真ん中に「ろうそく迷路」を作り「通ってはいけない」といい、食卓を置いたのが最後の作品となった。退所後の生活を報告する様子には CI なるの決意が感じられた。

IV. 考察

1. 『秘密の花園』 バーネット著

奥さんが急死した後、鍵がかけれ誰も入らない庭があった。庭のことを語られると感情的になるから誰も近づけない。庭は大きな大きなコンプレックスの存在を暗示していた。国中で一番安心して巣がかげられることを知っている小鳥たちが場所の取り合いをしている素敵な場所でありドアもないというのに不思議だが、コンプレックスとはえてしてそういうものだろう。花園とは主人公メアリがつけた自分だけの名前であった。その庭を眺めることは、永遠に触れることができる不思議な魔法のように見える一方でその科学実験は現実的かつ単純で妖しげなところは何もないとバーネットは記している。西田幾多郎とユングの二人連れがまた、同じ時代に東西思想の比較を徹底しようとし、同様の結論を残している如く、京都にある竜安寺の石庭は海外の人々をも魅了してやまない。その美学に潜む原理を何としても説き明かしたい。

2. 隠された神々

無意識の表現は、大拙 (1954) の主張のように一またユングやカルフがそうであったように、歴史的な源泉である哲学や宗教に還って考察するしかない性質のものである。物語の主人公の性格を凡夫の視点から「生意気」等恣意的に解釈することは子どもの宇宙 (河合 1987) の尊厳への破壊行為に他ならないがなぜかまかり通り、見立てやモドキとして隠されつつ表現される原理 (吉野 1992) は放置されたままである。

① 呪術その一 お供えして祈る

民俗学者である吉野裕子は食べ物をお供えして待つのが、日本人の祈りのスタイルであると述べた。さらに言えば、CI の作品に一貫して登場するお供えの場所を観察するとき、そこには吉野の主張する易陰陽五行説の場所論が一奈良明日香の古墳群にも通底する集合的無意識を翻訳するための鍵一存在するよう感じられる。

② 呪術その二 じゃんけん即永遠

じゃんけんは戦後の壊滅状態から復興する際に集合的無意識内で濃厚であった五行思想が平和の哲学として進化した民族的文化遺産である。シェルターでの絶望的のままならない現実において箱庭という未知のものに遭遇したところが新しい風を取り込み自らを再生しようと鼓舞する祈りの気持ちがじゃんけんにはこめられている。時に過去現在未来を 1 つにする花園への鍵になることもありうる普通の遊びなのである。

③ 呪術その三 二重世界と砂

物語の本質である二重世界は、宗教哲学において「平常心」や「平常底」として考察され続けてきたことに関連するだろう。これまでの五報において筆者が起承転結の「転」にあたる作品に注目してきたのは、時熟としての開花は現実には十牛図の【返本還源】や西田の【非連続の連続】の如く唐突かつ瞬時に起こる印象が否めない一方で、箱庭作品には永遠性が表現される不思議からであったが、【花園】や【じゃんけん】は日常と永遠という 2 種の時間軸をもつ集合的無意識内における百尺竿頭＝祖師西来意と知った。あまりに明るく現実に帰還した CI だが、絶対現在の自己限定を経て【生きる】過程で砂そのものを入れ替えるほどの変容を遂げる必要があったことは見過ごされてはならないだろう。

V. おわりに

メアリも西田もユングも CI も花園で実験をし、【華開世界起】の奇跡に出逢った。二次被害防止のための呪文「汝欲見仏性 先須除我慢」(竜樹) を、バーネットは彼女流に翻訳している。「それは習慣ではございません」という言葉が出たらそのお話はお終い……と。

そして、埋まっている鍵が朽ちないうちに探さねば手遅れになる!